

一仏両祖の教えを今に伝える

曹洞禅 グラフ

SŌTŌZEN GRAPHICS

2022お正月 冬号 No.159



インタビュ
フリージャーナリスト
西村一郎氏
ペンを通して
伝えたい、
生きて
生かされている
大切さ
「聞き手」柳澤円

令和四年

迎春

ぎょうじどうかん
行持道環



曹洞宗管長 大本山永平寺貫首
みなみさわどうにん
南澤道人

行持道環

永平道人



令和四年の新春に当り皆様方のご多幸を心よりお祈り申し上げます。

仏道修行は、発心(自覚)・修行(行動)・菩提(成果)・涅槃(休息)の道程を一生の間、一時も休むことなく繰り返しされるので、行持道環とも申します。一年に春夏秋冬の四序が厳然としてあるように、我々も一朝朝昼夜の生活が一生続きます。これは大自然の道理と云えましょう。

近年、文明の進化と共に我々の生活がこの道に逆らっていることを見過ごし、道理に反するようになったのではないのでしょうか。

地球温暖化や気象の異変は人間生活に原因があると国連の専門家より警鐘が発せられております。一昨年来のコロナ禍も関係なしとは思われません。我々は文化生活の享受を反省して、大自然の道理に適った毎日をつとめるべきでしょう。行持道環はすべての人に努めていただく道でもあります。合掌

福如雲
(福は雲の如し)



大本山總持寺貫首
いしづきしゅうこう
石附周行

福如

雲

總持周行



謹んで令和四年(二〇二二)の新春を迎え、心よりお慶びを申し上げます。

拙柄、昨年九月十九日に前貫首・江川辰三猊下の御遷化により新貫首として入山し、御本山での新春を初めて迎えたところでございます。緑樹に囲まれた参道を登るたはずまいは、御本山にふさわしい靈気を感じます。禅語に「福は雲の如し」と言われますが、仏や自然の福(恵み)は雲のように人々を覆い雨降らず、と示されています。

私たちの命は、自然環境という大きな生命に生かされています。それを個体としての命が摂取し、助けられて、自主的な生命にしているわけです。

一昨年来、新型コロナウイルスに苦しめられた地球上で、今年こそはどんなすばらしい年に切り替えられるか、「福は雲の如し」の実現に努力を重ねて参る所存であります。どなたにも輝かしい年でありますよう祈念申し上げます、ご期待申し上げます。

合掌

にしむら/いちろう

1949年 高知県生まれ。2010年公益財団法人生協総合研究所を定年退職後、フリーのジャーナリストへ転身。著書に『協同っていいかも』(合同出版)『被災地につなげる笑顔』(日本生協連出版部)他多数、近著は2020年『広島・被爆ハマユウの祈り』(同時代社)。2012年には平和・協同ジャーナリスト基金奨励賞を受賞。



聞き手
柳澤円

昨今、お互いの違いを認めあう多様性の大切さを見聞きすることが増えました。状況次第で誰もが社会的弱者の側になる可能性があります。個々人が幸せに生きられる社会への変容が求められている局面でもあります。国連が打ち出した二〇三〇年までの持続可能な開発目標SDGsがうたうように、「誰ひとり取り残さない」社会を実現するためには、どうしたらいいのでしょうか。

東日本大震災後、被災地にて



被爆ハマユウを届けたスリランカの小学校には文房具の支援も(2008年)

ペンを通して伝えたい、生きて生かされている大切さ

会課題と不条理の中で暮らす人々のことを伝えたい一心で、単独取材を続けています。幅広いその活動内容とともに、私たちひとり一人ができることについてうかがいました。

インタビュープロフィール
柳澤円(やなぎさわまどか)
ライター、編集、翻訳マネジメント。食と農と社会の課題をテーマに執筆する。
株式会社Two Doors 代表。



立派に咲く被爆ハマユウ

非核の願いと共に被爆ハマユウを届ける運動を起こしました

——主に取材されていることの内容や活動について教えてください。

西村さん ひとつには東日本大震災の被災地を訪ねて、人々の活動を取材しています。津波の被害を受けても負けずに立ち上がり、ビニールハウスで小松菜を周年栽培する若き生産者や、インクルージョン(包括的)社会を願って活動する南相馬の障がい者施設などを訪れて話を伺



カースト制度の「ダリット」の里子支援。右隣はお孫さん(ネパールにて・2018年)

今では国内外でさまざまな施設や団体が被爆ハマユウを育てています。国内では、私も毎年訪れている広島市の平和記念公園をはじめ、尾島さんの地元である神奈川県の大船観音、都内では、東京大空襲・戦災資料センターや都立第五福竜丸展示館(ともに江東区)などです。海外では、台湾で二万人もの市民が犠牲になったとされる二・二八事件の「二二八和平公園」や、日本で被爆した方々が帰国した韓国の「韓国原爆被害者協会」、マーシャル諸島やスリランカの小学校などです。これからも希望のある場所へ、非核の願いと共に届けたいと思っています。各地で被爆ハマユウを知ることが、三つの点において意義があります。一つ目は、被爆ハマユウの生命力を感じることに。爆心地の近くでも生き残った事実に加えて、ハマユウ自体がとても強く、



スリランカの学校へ被爆ハマユウを寄贈

日当たりのいい場所に植えられたら肥料も要らずに雨水だけで立派に成長してくれます。力強い植物の成長を身近で見守ると、自然の輝く生命力を実感するでしょう。二つ目は、文化的価値のある被爆ハマユウを通し

つています。また非常に悲しいことですが、震災後は被災地をはじめとして震災関連の自殺者が増えてしまいました。厚労省の発表では二〇一一年からの一〇年間で二四〇人が亡くなり、今もなお震災を理由に自ら命を断つ人がいます。都道府県別にみると、半数近くが福島県の自殺者だとわかります。実際にご遺族や地域を取材すると、放射能汚染という前代未聞の事故被害により深い絶望を感じたことが起因しています。お歳を召した方も若い世代も、あまりにも不条理な最期だと感じました。そうした方々の存在を示し、声を届けたいと思って取材を続けています。

もう一つには、平和を訴求する一環として「被爆ハマユウ・クラブ」の活動をしています。インドハマユウという白百合のような花が咲く品種で、被爆と名が付く理由は、広島に原爆が落とされた際、爆心地から二キロの距離に植わっていたにも関わらず、兵舎の陰で直撃を免れた植物だからです。当時、曹長だった尾島良平さんは被爆しながらも一命を取り留め、このハマユウを鎌倉の実家に持ち帰り、戦後は増やした株を各地へ移植していきました。尾島さんは残念ながら1979年に他界され、その後は息子さんハマユウを繋いでくれていたんです。被爆ハマユウのことを聞いた私は尾島さんを訪ねて、少しでも力になればいいと思います、一九九五年に「被爆ハマユウ・クラブ」を作りました。

て、この社会の多様な価値観を周囲の人々と共有できること。そして三つ目は、被爆ハマユウの歴史を知り、誰かとの出会いや繋がりの大切さを実感できることです。どんなに優秀でも一人で生きていける人はいませんし、人と人、人と自然界、過去と未来など、誰もがいくつもの関係性の中で生きて生かされていると実感できれば、それは自らの豊かさの成長に反映するのではないのでしょうか。

私の人生の三原則 「歩く」「聴く」「書く」を続けて 復興現場のルポルタージュを続けたい

——被爆ハマユウ・クラブを作られた1995年は、東日本大震災よりもずっと前ですね。

定年退職した二〇一〇年までの四〇年間、生協で働いていました。退職までの一八年間は、生協総合研究所の研究員として、北海道から沖縄まで、毎月のように全国の生協や生産者などを訪ね歩きました。それぞれの現場に入って話を聞き原稿を書くといったことを続けていたんです。実は一九八〇年に親友を自殺で亡くしました。それが私の一大転機となり、自らの生き方や社会のことを学び直そうと、哲学者の芝田進午さんの研究会でお世話になり始めたんです。考え方や社会構造の捉え方など、今も大切にしている価値観の多くを教わると同時に、現場に

入る重要性も学びました。その教えのおかげで、生協の研究者としても積極的に情熱をもつて各地を訪れることができました。

毎月かなりの原稿を書いていたことは、一九八五年からお世話になって「現代ルポルタージュ研究会」、通称「ルポ研」での学びも大きく関わっています。ルポルタージュの基本は現場取材ですから、現場の事実から理論を普遍化することやルポの書き方など、大切なことを色々教わりました。のちに被爆ハマユウを知ったのも、こうした様々な活動の中で出会った方が教えてくれたことです。こうしたこれまでの実践や経験から、定年後もフリーのジャーナリストとして被災地など各地へ出向くことは、私にとってごく自然なことでした。

日本の未来を諦めず、食と農の安全性を希求

——いっしょの活動が繋がっているんですね。

原点は両親のことです。中国で敗戦を迎えた父は、自ら左目を潰して傷痍軍人になることで帰国し農家になりました。しかし、なぜ父が片目を失わなければいけなかったのか。その無念さと平和への思いを、私のこだわりとして引き継ぎました。また高度経済成長期のはじめごろ、まだ私が小学三年生のときに、優しかった母は

らしい人がいます。そうした現場を訪ね、これまでに被災地の復興に関係した書籍を八冊上梓しました。なぜそこまでするのかと聞かれることもありますが、これが私にできる支援の手段だからです。また、故郷である高知の言葉で「いっこそう」と言い、お金の価値だけに執着しない、自分なりのこだわりを大事にする土佐人男性としての特性なのでしょう。

今、私の人生の三原則は「歩く、聴く、書く」です。体が動かなくなるまで現場主義でいたいし、自分にできることとして書くことを続けていきたいもので、そのために健康管理に気を付けています。

取材後記

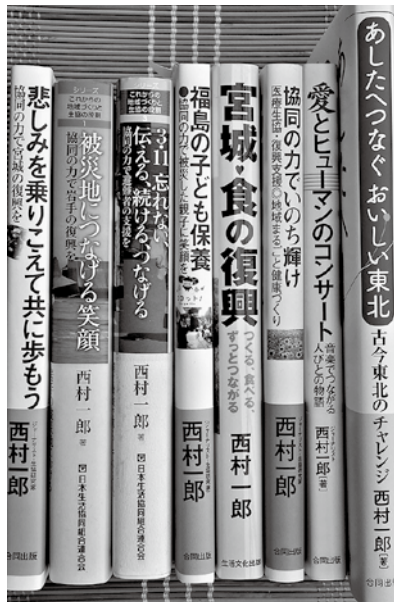
食、農、平和、非核、被災地支援と、一見

強い農業の影響からガンを患って他界しました。そうした両親のことから、平和な社会と、食と農の安全性を希求することが、私の思考や行動の原点となり今につながっています。

二〇一一年の東日本大震災では、東北にいた生協の正規職員が20名も亡くなりました。翌日からの福島第一原発事故の影響により、私が家族と暮らす取手市もホットスポット（気象条件によって生じる放射性物質の残留が高い地帯）になってしまいました。定年後はのんびりするはずでしたが、そんな場合ではないと強く思ったのもこの時です。震災から五〇日足らずで開通した東北新幹線などと、自分の折り畳み自転車で頻繁に被災地へ通うようになると、書いて残さねばいけないことが山のようにあると感じました。「足で書く」と言われるルポルタージュは、取材にも時間と費用が掛かります。それでも各地の協同を大切にしたい復興の現場を訪ねると、必ず素敵な取り組みがあり、ワクワクする素晴

幅広く色んなことをされているように感じた西村さんの活動は、聞けば全て意識下で繋がっていることを実感しました。西村さんが長年、食と平和という根源的なテーマを追い続けた道のりは、不条理の下で暮らす人がいまだ絶えない現実と、一方で、それでも西村さん自身が日本の未来を諦めずにいることを物語っています。

取材前にいただいた資料には、日付の西暦二〇二一年に並んで「反核紀元76年」という見慣れない元号がありました。これは「歴史の節目に元号を付けるのならば、決定的に前後を変えた人類初の原爆投下の年にこそ普遍性がある」と、西村さんが年賀状などに用いる元号だそうです。紙片の片隅からでも平和を訴求できることを教えていただき、感銘を受けました。



東日本大震災の被災地復興支援に関連した書籍は現在8冊に

今回の特集にご登場頂いた西村一郎氏の著書『広島・被爆ハマユウの祈り』を5名の方にプレゼントいたします。仏教企画(下記「お便り募集」送り先)まで、お名前・郵便番号・ご住所・電話番号・プレゼント名を明記のうえハガキでご応募ください。



2022年2月末必着

曹洞禅グラフ157号(夏号)プレゼント、永井政之駒澤大学総長の著書『ふっと心がかかる禅の言葉』は次の方々が当選されました。

青森県/高橋敦様 宮城県/村上治憲様
千葉県/池田圭子様 長崎県/鈴木博子様
宮城県/山口洋子様

身近な人との心温まるふれあいや本誌への感想、仏教についての質問などを600字以内でお寄せください。Eメールでも受け付けております。

送り先.....
〒252-0116
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
仏教企画編集部
Eメールアドレス.....
fujiki@water.ocn.ne.jp

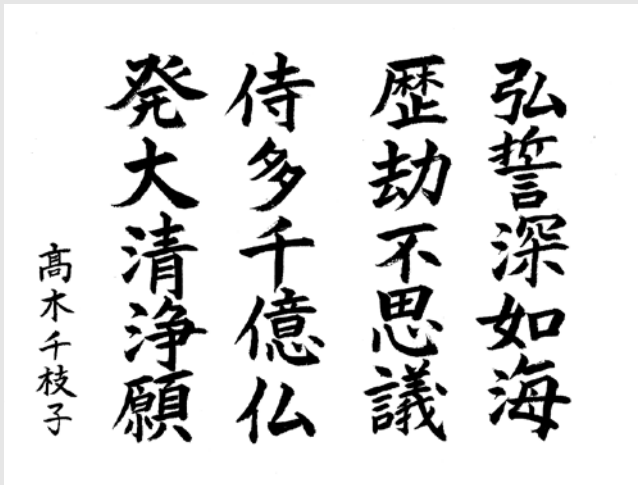
『曹洞禅グラフ』158号において、瑩山禅師のお話が載っていますが、興味深く拝読させて頂きました。『洞谷記』の一節に「このお寺がある限り、未来永劫精一杯お檀家さんたちをお守りします」とあることを知って、改めて瑩山禅師のありがたみを感じることができました。ありがとうございました。

東京都 岩淵修身 様

仏教企画 | 毎日書道 | 作品審査評

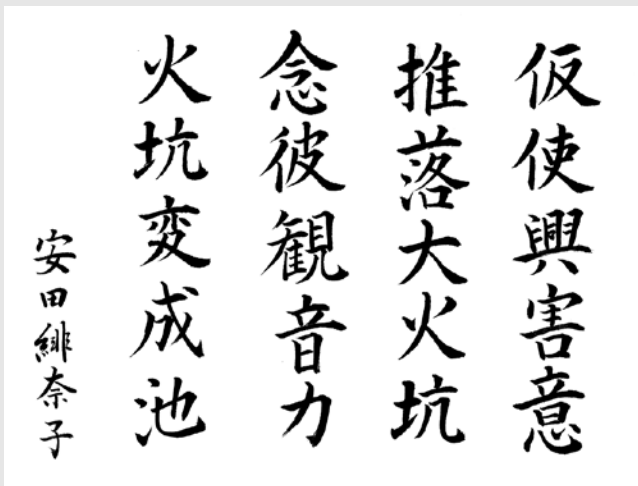
今回はグラフ153~156号の写経手本による173の応募作品の中から書きぶりの素敵な作品10点を選び
寸評を添えました。甲乙つけがたい作品揃いでしたが、優秀作品の図版掲載はお二人とさせていただきます。

- * 青木文子さん 毎号、丁寧に一字一字書かれて、線の美しい作品です。(153夏号~156春号)
- * 阿部嘉子さん 筆がよく走り切れ味良く、柔軟さもあり見事な作品です。(153夏号)
- * 麻生寛子さん 毎号堂々とした字形で気持ち良く書かれ、立派な作品です。(153夏号~155冬号)
- * 水野覚禅さん 力強いしっかりした運筆で、楷書の基礎である見事な作品です。(154秋号、156春号)
- * 東安夫さん 幅広いのある線情に力強さもあり、見事な作品です。(155冬号、156春号)
- * 大箴恵美子さん 筆尖が良く活躍し、線が力強いひきしまった作品です。(155冬号)
- * 河内禮子さん 起筆、収筆、払いの基礎がしっかりして穂先心得た良い作品です。(156春号)
- * 高橋ハマ子さん 二十字を丁寧に書かれて、特に一行目の五文字が堂々と書かれて立派な作品です。(153夏号)



高木千枝子

高木千枝子さん
迷いなく大書され、堂々とした、
大変気持ちの良い作品です。

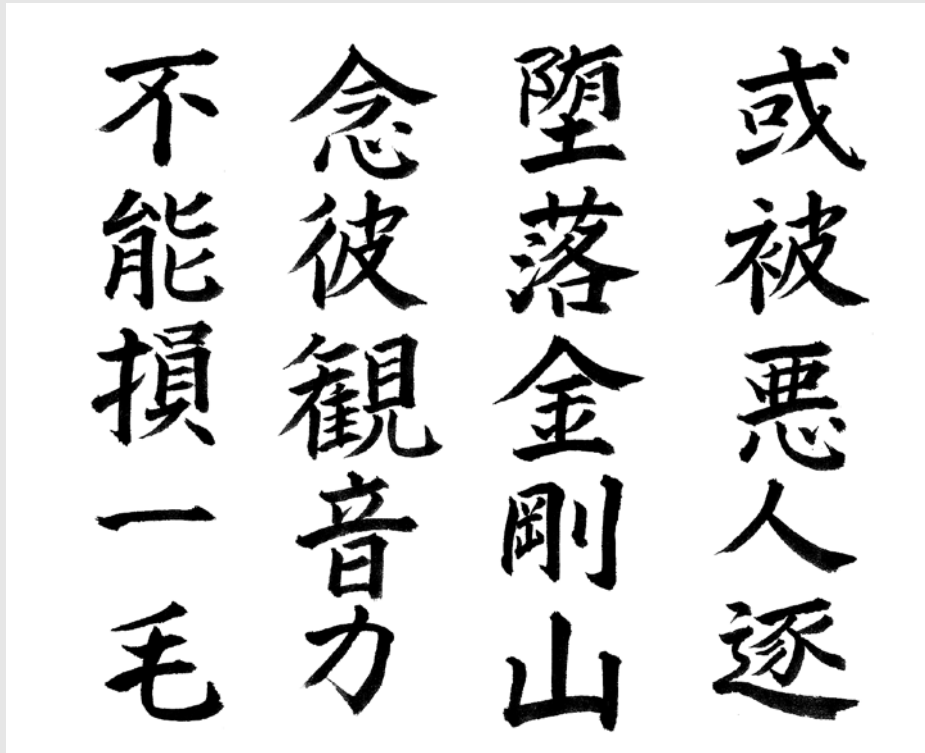


安田緋奈子

安田緋奈子さん
良く幅広い美しい線情、
穏やかで丁寧に書かれた作品です。

毎日書道

書家 松山妍流



作品集 公募

ご家族のみなさまの応募をお待ちしております

お手本を参考にして、作品を半紙(横向、お名前は左側)に書いてご応募ください。(無料)
ご応募の中から優秀な作品を選び、年に1度誌上で発表し、記念品を贈呈します。
住所、氏名、電話番号を明記して作品をどしどしお寄せください。
153号(夏号)~156号(春号)の作品をご応募の方の審査発表は、159号(今号)にて、
157号(夏号)~160号(春号)の審査発表は、163号(冬号)にて行います。

送り先 〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
仏教企画 電話042-703-8641

締切 2022年2月末 (末日消印有効)

松山妍流先生は、埼玉県所沢市吉祥院住職丸山劫外師のお姉さんで書家(佐藤柯流に師事)です。

或被悪人逐
墮落金剛山
念彼観音力
不能損一毛

解説
或いは悪人に逐
かけられ
金剛のように硬い
山に落とされてし
まっても
彼の観音の力を念
ずれば
一毛も損なわれる
ことはない

俳句募集



撰者

尾崎竹詩
神奈川県現代俳句協会会長

このたび『曹洞禅グラフ』の新企画におきまして撰者をつとめさせていただきます尾崎竹詩と申します。俳句作品の募集を始めていただくにあたりご挨拶申し上げます。

日本には四季があります。その四季が様々な美しい景色を演出してくれます。道端の草花や小さな虫たちにも心を動かされる日常があります。日本人は古くから自然に抱かれて、移り行く四季を享受してきたのです。

ところがその四季に変化が見られるようになってきました。文明の進歩と温暖化が地球とその季節を変えているのです。時代とともに季節感が異なってきました。

また、二年前には新型コロナウイルス感染症が人類の生活を一変させてしまうほど世界中に大きな影響をもたらしました。私たちの生活や日常が覆されてしまったのです。心にもかつてない衝撃を受けました。

現在の地球に生きている者がありのままの自然や考え方を残しておくことが必要ではないでしょうか。私たちが松尾芭蕉や与謝蕪村の感じたこと・考えたことを知り、心震わせる勇気を奮い立たせているように、次世代の人々に何

かがいっばいあると思います。それを文字に記録していくことが自分磨きに繋がってくると思います。それがあなたの俳句です。

俳句はペンと紙さえあればいつでもどこでも書き留めておける利便性があり、手軽だけれど

かを残しておきたいものです。

私が俳句に興味を持ったのは大学入学まもなくです。新入学生入部勧誘で俳句同好会がユニークだったことで興味を持ちました。

そこで図書館で調べてみたら、私の俳句に対して抱いていた知識・感想と違った俳句に惹きつけられたのです。

それまでの自然や季節を五・七・五にまとめるといふ俳句と違い、金子兜太の前衛俳句といわれる斬新な内容と伊丹三樹彦の「分かち書き」という表現方法があります。このお二人の旗手がそれまでの俳句観を一扫してくれました。俳句の作り方で批評されたり、上手な俳句とはと説教されたりするより、発見したことや感動したことを素直に表現していいんだと教えられました。俳句は何を表現してもいいんだ、どう表現してもいいんだ、という自由に憧れて俳句にのめりこんでいったのです。まず、感動することが一番大切なことだとわかりました。そのためには周りを観察し、自分の感性を磨くことが必要だと気づかされました。

みなさまもぜひご自分の周りを見回してみてください。発見したこと、不思議な事、大切な潤いと元気をもたらしてくれるのです。そして日常生活に潤いと元気をもたらしてくれたいです。

奥深い表現ができるからです。そして日常生活に潤いと元気をもたらしてくれたいです。あなたで作った一句が多くの人々の心に沁みいくことになるかもしれません。

今回はご参考までに二作品を紹介します。

音合わせ始まっている春の山

川村研治

毎年三月ともなると、野に山にこぞって生命が動き始めます。あるものは小さな芽を出し、あるものは美しい花を咲かせます。その様はオーケストラの演劇前の音合わせみたくです。

人類のふる里一つ冬銀河

尾崎竹詩

冬の星空は、空気が澄んでいて数多の星も輝きに満ちています。私たち人間が住める星があるのでしょいか。否、この地球以外には生きていける星は見つかっていません。

作品募集 (無料)

みなさまのご応募をお待ちしております(お一人3作品まで)

選者は尾崎竹詩先生(神奈川県現代俳句協会会長)です。

書式自由

自然や季節のすがた、人生の機微、人の心の移ろい等ご自由なテーマでお作り頂いてご応募ください。

お申し込み方法

作品、住所、氏名、電話番号を明記して下記のいずれかにてお寄せください。

1 はがき、封書で投稿

送り先・〒252-0116
相模原市緑区城山4-2-5
仏教企画
『曹洞禅グラフ』俳句募集係宛

2 Eメールで投稿

fujiki@water.ocn.ne.jp

3 FAXで投稿

042-782-5117

締切

令和4年2月28日 消印有効

- ご応募の中から優秀な作品を選び、誌上にて発表します。
- 更に年に1回冬号(新年号)にて年間優秀作品を選出し、記念品を贈呈します。
- 159号(冬号)~161号(夏号)の作品をご応募の方の年間審査発表は、163号(冬号)にて行います。

前回の「受」、今回の「想」に共通するテーマは《感じる》です。

《感じる》を意味する代表的な熟語として「感覚」と「知覚」があります。この違いを解説いたします。

◆「感覚」とは、ある刺激情報によって、即時・受動的に受容されている状態です。では、ある刺激情報とはどのようなものなのでしょうか。

私という存在が受容する刺激情報の出所は、大きく二つに分けられます。

- ひとつは外部から。
これは『五感・視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚』によって受容される刺激情報です。
- もうひとつは内部から。
これは『運動神経(自己受容感覚)・平衡感覚・内臓感覚』として受容される刺激情報です。

本来外部内部から起こる刺激情報は、同時無限に作られ続けます。そして私という存在はそれを選別することなく受容し続けています。

ある刺激情報とは、すべての刺激情報から、刺激の強さや個々

優しさが培われる **五** **蘊** の **智** **慧**

藤井隆英

ふじい・りゅうえい
豊橋市一月院副住職。
横浜市 徳雄山 建功寺
勤務。北海道大学水産
学部卒業。同大学院中
退。整体師。Zaui代表
身心堂主宰。「ぶさぎ
ふ」「安楽坐禅法」開
発者。禅をベースにし
たオリジナルの運動療
法、動的瞑想法を伝え
る活動を展開。

2 想 ~ どう感じるか ~

の感受特性によって潜在的に勝手に選別された上で受け止められ意識に登る情報です。

改めて「感覚」とは、選別された、ある刺激情報、意図なく受けると同時に《感じる》状態です。

◆「知覚」とは、「感覚」を、私の内に存在するイメージの元、とつながりながら能動的に意味づけされた上で《感じる》状態です。

「知覚」の源泉となるイメージの元とは、過去の経験や学習によって獲得してきた固定的事象です。この事象は固有のものであり、私と他者のイメージの元が一致することは絶対ではありません。

表題である「想」を、「感覚」「知覚」の概念により説明すると、ある刺激情報がイメージの元、とつながり表出された再現可能で固有な精神作用となります。

今回は、呼吸とともに身心がどう感じるかを探り、安らかさを獲得する「スリータッチワーク」をお伝えします。

1 胸で開放する



軽く胸を開くようにしてイスに座ります。両手の平を左右の胸にそっと置きます。息を1回意識的にゆっくり吐くのと合わせ、3回手の平で胸を押さえていきます。1回目は軽く身体表面の感触を味わい離します。2回目は胸内側からの感覚を手の平で受け止めるよう触れ離します。3回目は息を吐ききるまで心地よさを探りながら押さえ、吐ききったら息を吸いながら手の平を離します

2 鳩尾で弛緩する



リラックスして両手の平で鳩尾を覆うようにそっと置きます。息を1回ゆっくり吐くのと合わせ、3回手の平で鳩尾を押さえていきます。1回目は軽く身体表面の感触を味わい離します。2回目は内側からの感覚を手の平で受け止めるよう優しく触れ離します。3回目は息を吐ききるまで、押さえた事で起こる感覚刺激を意図なく受け止め続け、吐ききったら息を吸い手の平を離します。

3 下腹部で安心する



安らかさを携え下腹部左右に両手の平をそっと置きます。息を1回吐くのと合わせ、3回手の平で下腹部を押さえていきます。1回目は身体表面からの感触を味わい離します。2回目は身体内部からの情報をより深く受け止めるよう手の平の触れ方を調整し離します。3回目は身体内部と押さえたことによる情報がどちらも心地よい状態であるよう探りながら吐ききり、吸い離します。

お 釈迦さまは、お悟りを開かれてから八十歳で亡くなられるまで四十五年間、一日も休まず諸国を遊行し、人びとのところに智慧の光を灯し続けられました。その教えは倒れた人があれば抱き起すように、息苦しさを感じている人には、

その覆いを取り除くように、迷っている人には正しい道を示すように、暗闇にあかりを灯すように、さまざまな方便を用いて説き示されました。

弟子たちは、いつもみな一緒に同じところで生活しているわけではありません。諸国、各地に散らばって修行を続け、教えを広める活動をしてきました。お釈迦さまの教え

は今では経典にまとまっておりませんが、インドでは古くから知識は口で伝える「口伝」という方法が習わしでした。

文字に表すと汚されたり、破られたりといった、教えの神聖性が損なわれてしまうことも考えられます。また、文字で表せば、教えそのものが自分の身につきにくいのです。そこで、教えは暗記することです。そこで考えられたようです。

禅門では「不立文字」「教外別伝」と説きます。禅や悟り、仏は、言葉や文字ではあらわすことが難しいのです。また、お釈迦さまのお悟りは言葉では伝えきれません。言葉は悟りの道筋や内容であって、全て言葉によって真髓を説き尽くすことができないという、禅の本質を表しています。私たちは経典を唱え、経典に学びます。文字は教

生活の中の仏教

禅

文字だけでは
伝わらない世界



挿絵 長谷川葉月

久保田永俊

くぼた・えいしゅん

1975年、東京都生まれ。駒澤大学仏教学部卒業。中瀧寺（千葉県いすみ市）住職。自死遺族に寄り添う活動に取り組んでいる。

えを伝える手段の一つにすぎません。言葉は非常に大切ですが、それに囚われすぎてもいけないので、一層難しく感じてしまうのです。

さてお寺の庫裡（居住部分）の床の間に、一幅の掛け軸がごさいます。その文字がとても達筆で私には判読できず、先代住職に尋ねてみました。すると「この字は先々代住職が書いたものだよ」と、由来を教えてくださいました。

龍吟雲起 虎嘯風生（りゅうぎんぐんずればくもおこり とらうそぶけばかせしやうず）

「龍吟」は枯れ枝の間を抜ける風の音を表していて、ひとたび龍が吟ずれば雲がモクモクと起こり、「虎嘯」は、虎がウーッと嘯くと瞬く間に風が生ずるのです。まるで大地より涌出する朗々たる響きを表しています。まさに、これは禅の悟りの境地を表しているのです。龍と虎の勢いや、その迫力を禅門では優れた力量も意味しています。大人物の在り方でなければならんと、先々代住職は法孫である私に説いているのでしよう。日々の日常体が問われております。

今あらためて知る 「父」「祖父」のこと

聞き手 柳澤 円

本誌夏号にて、悪性リンパ腫の闘病体験を聞かせてくださった佐藤武宏さんが、二〇二一年五月十八日、黄泉の国へ旅立たれました。同年一月の取材時は、抗がん剤治療の目的を「完治のため」と力強く明言し、未来に向けた視線が印象的だっただけに、急なお別れが残念でなりません。治療がひと段落したらまた別の視点から闘病体験を聞かせてくださるはずでしたが、それも叶わないことになってしまいました。佐藤さんのご冥福をお祈りすると共に、そのお人柄に触れたいと思い、ご家族をおたずねしました。お話を聞かせてくださったのは、佐藤さんの次女で看護師をされている吉川寛美さんと、長女の息子さん、つまり佐藤さんのお孫さんにあたる、高校の教員をされている武智将さんのおふたりです。



『曹洞禅グラフ』156号の記事より

母から電話で、父の体力がなくなったこと、起き上がるだけでも三〇分以上かかったことなどを聞き、いよいよ病院に連れて行くとうい話になったんです。そのまま入院しましたがその後も容態が良くなることはなく、一〇日目くらいには意識がなくなって、さらに二日後の五月十八日に亡くなりました。

抗がん剤治療が進むにつれて食が細くなり、大好きなお酒もだんだん飲まなくなっていたので、よっぽどきついんだろうとは思っていたんです。最後

つらい顔は見せず、 母を思う父

次女の吉川寛美さん

吉川さん わたしは身近な家族を亡くすのが初めてなので、父がいないことが少し変な感じというか、三ヶ月経った今になって少しずつ実感している心境です。家族を気遣う父は、闘病中に「辛い」と言ったこともありませんでした。抗がん剤治療も通院ではなく、その都度入院していたのは、コロナ禍という理由の他に、もしかしたら自宅で辛い顔を見せないためだったのかもしれないかもしれません。そんな父が最後は、病院に連れて行くことを即諾したので「最後は本当に辛かったんだろう」と姉と話しています。

**重い病気と向き合うときには、
本当の思いや希望などを
話す機会をつくるのが大切**

もしよろしければ、その時のご様子もお聞かせください。

吉川さん 四月の末頃からあまり食事ができなくなっていました。連休中に

の入院の半月ほど前に一度だけ、大学時代のお友達と食事に行くと言い出しました。心配したのですが「一人で行くから」と出掛けてしまったことがあったんです。実はその少し前にCTの結果が良くなって、抗がん剤が効いていない等の話をされたらしく、それががんばってお友達に会いに行っただけであ、と。あの日は少しだけ飲んで帰ってきて、その後から少しずつ具合が悪くなっていったので、無理に強く止めたりせず行かせてよかったと思っています。

父は今まで大きな病気などもなく、元々の性格もひとりで色々できるため、悪性リンパ腫だとわかった時からずっと病院とのやりとりも父がすべて自分でしていました。私たち家族が病院の先生と直接お話ししたのは最後に入院した時です。治療の初期からあまり思い悩む様子も見せず、また父の性格もあって、本当の思いを聞く機会はなかったのかもしれませんが。今もしも、何か重い病気と向き合うことになった方は、ご家族に思いや希望などを話す機会をつくるのが大切だと思います。

色々な父を今改めて
知っているとこそです

——佐藤さんの誠実なお人柄を感じる
お話ですね。

吉川さん 真面目な性格だったとは思
います。家ではあまり自分の話をする
ことはありませんでしたが、亡くなっ
てから色んな方にかがって、親子と
いうだけではわからない、色々な父を
今改めて知っているとこそです。建築
の仕事のお付き合いや、アンコールワ
ットでの活動など、お友達の多さも改
めて感じました。コロナ禍でなければ
できるだけ大勢の方を呼んで、父の好



五十代後半の佐藤さん(右)と小学校低学年の頃の
武智さん。おふたりの仲の良さがうかがえる。

きだったお酒を出して賑やかなお葬式
をしてあげたかったのですが、叶わな
かったのは残念ですね。

祖父はたくさんのことを
教えてくれた存在

孫の武智将さん

——お祖父さまとの思い出などお聞か
せいただけますか。

武智さん 色々なところに連れて行っ
てもらいました。僕は登山が大好きな
んですが、それは元山岳部で山好きの
祖父の影響です。あと落語ですね。小
さい頃も寄席に連れて行
ってくれましたし、大人
になってからも何度か一
緒に行きました。祖父に
とっては僕が最初の孫だ
ったこともあり、昔から
ずっとかわいがってもら
ったんです。車で一〇分
くらいの距離に住んでい
ることもあり月に一、二
回は会っていました。進

学や就職は自分自身で決めてきました
が、祖父が常に応援してくれているこ
とは実感していましたし、何か新しい
出来事を報告すると「おう、そうか」
といつも嬉しそうに聞いてくれました
ね。社会人になっても子どもの頃と同
じようにかわいがってもらえたことに
感謝しています。

——ご病気を知らされた時はどんなお
気持ちでしたか。

びっくりはしました。年齢的には体
のどこかにトラブルが出ることは想定
できていたものの、祖父は行動的でし
たから。実は今年(取材時の令和三年)
の初めには父も突然他界したんです。
一年くらい前から調子が悪いときがあ
って入院していたとはいえ、まだ若い
ですし本当に急で、今もまだ実感があ
りません。ただ祖父の場合は、闘病に
寄り添えたと思いますし、コロナ禍と
はいえ入院中にお見舞いにも行けたし、
ある程度の覚悟はできていました。

——寂しさがゆっくり感じられること
は救いですね。

祖父にはこれまで色々なことを教わ
りましたが、今感じることは「時間は



有限」ということだと
思います。何ごとも永
遠はなく、いつかは終
わりがくるので、その
時後悔しないためには
どう生きるべきか、と
考えさせられました。
家族も同じです。物静かでもバイタリ
ティがあった祖父がいなくなってしまう
い、明るく華やかな祖母も一人暮らし
になってしまいうので、できる限り話し
相手になりに行こうと思っています。
今はまだうまく言葉にできませんが、
祖父が最後に教えてくれたことは、僕
のこれからの人生にも影響するでしょ
うね。

祖父の遺品整理もこれからなんです
が、パソコンの中に闘病記録がたくさ
ん残っていました。よくパソコンの前
に座っていた思い出はあるものの、こ
んなに書いていたとは、と驚くほど。
蔵書の数もすごくて、中でも歴史やエ
ッセイ、旅行記といった祖父の好きだ
った分野からチェ・ゲバラの日記まで、
幅広い種類の本が悩ましいほど大量に
あるんですよ。



茶の湯に由来する禅語に「一期一会」

いまは比較的良く知られていますが、もとは千利休の言葉とされるものです。その意味は、今対面している相手と会うのは一生に一度きりで、二度とその機会が戻ってくることはない。そうであるから、いま、相手のためにできることを、心を込めて精一杯やらなければいけない、ということとです。



『聴籟庭』東京都 / 個人邸

茶会には何度も同じ人を招くことがあります。同じ茶室で同じ人にお茶をふるまう。そのようなことがあつてのことでしょう。たとえば、朝家を出るときに家人と口喧嘩をしてしまったら、機嫌も悪くなりますし、それは仕方がないことです。しかし、その機嫌の悪さをその場に置いて家を出るのです。そう、気分を切り替えるのです。家を一步出たら「よし、今日もいい日にするぞ!」と自分に声をかけるのもいいかもしれません。

常に一期一会を心がけていたら、人間関係の質が格段に違ってくる。相手に自分を深く理解してもらえようになり、相手に対するこちらの理解度もグッと深まるのです。人間関係の味わいが増して、人生がもっと、もっと、おもしろくなってきます。コロナ禍の時代であるからこ



『悠久苑』山口県 / 防府市斎場庭園

時であつても、その茶会は一生涯に一度限りのもの。そのときに、精一杯をつくすこと、その心持の大きさを説いた言葉です。人生はときの積み重ね、もつといえ、瞬間、瞬間の積み重ねです。もし、その瞬間を精一杯取りくまなかつたら、「そのとき」も自分の人生に重なっていく。そうなれば人生の充実感をそぐものであることはいうまでもないでしょう。人は日々、たくさんの人た

ちとかかわっています。そのかわり合いの一つひとつに、一期一会の心をもつてあつていきますか。誰だつて気分がすぐれないことがあるでしょう。機嫌が悪いということもあつて当然です。そんな状態で人に接したときは、すぐれない気分や、機嫌の悪さを引きずつて、相手に対応することになるなどしがちではないでしょうか。無愛想な態度をとつたり、邪険にしてしまつたり……。しかし、考えてみてください。その相手と会うのがそれつきりになつてしまつたら、そんな対応をした自分を悔やみませんか。自責の念にとらわれないでしょうか。禅は、思いや感情はその場に置いていきなさい、と教えます。気分がすぐれないのも、機嫌が悪いのも、何かの原因



いまこそ禅にふれるとき

枅野俊明

人生は瞬間、瞬間の積み重ね

そ、なお一層「一期一会」を心がけたいものです。

合掌



ますの・しゅんみょう
1953年、神奈川県生まれ。建功寺(横浜市鶴見区)住職。多摩美術大学環境デザイン学科教授。住職でありながら庭園デザイナーとしても高い評価を得ている。祇園寺紫雲台庭園『龍門庭』など国内外多数の庭園作品を手がける。『心に美しい庭をつくりなさい。』など著作多数。

『Garden for The Pavilia Hill』香港 / The Pavillia Hill

行持道環	曹洞宗管長	大本山永平寺貫首	南澤道人	2
福如雲		大本山總持寺貫首	石附周行	3
ペンを通して伝えたい、生きて生かされている大切さ フリージャーナリスト 西村一郎氏インタビュー			松山妍流	4
毎日書道			松山妍流	10
作品審査			松山妍流	11
新企画『曹洞禅グラフ』俳句募集			尾崎竹詩	12
優しさが培われる「五蘊 <small>ごおん</small> 」の智慧②			藤井隆英	14
生活の中の仏教―禅・文字だけでは伝わらない世界			久保田永俊	16
佐藤武宏さんを偲んで				18
いまあらためて知る「父」「祖父」のこと				22
いまこそ「禅」にふれるとき			榎野俊明	22

表紙画／平川恒太

新企画『曹洞禅グラフ』 俳句募集

作品募集 (無料)

みなさまのご応募をお待ちしております(お一人3作品まで)。選者は尾崎竹詩先生(神奈川県現代俳句協会会長)です。書式自由。自然や季節のすがた、人生の機微、人の心の移ろい等ご自由なテーマでお作り頂いてご応募ください。

お申し込み方法

作品、住所、氏名、電話番号を明記して下記のいずれかにてお寄せください。

1 ● はがき、封書で投稿

送り先＝

〒252-0116 相模原市緑区城山4-2-5
仏教企画 『曹洞禅グラフ』俳句募集係宛

2 ● Eメールで投稿＝fujiki@water.ocn.ne.jp

3 ● FAXで投稿＝042-782-5117

締め切り＝令和4年2月28日消印有効

ご応募の中から優秀な作品を選び、誌上にて発表します。更に年に1回冬号(新年号)にて年間優秀作品を選出し、記念品を贈呈します。159号(冬号)～161号(夏号)の作品をご応募の方の年間審査発表は、163号(冬号)にて行います。